

1 基本理念：「市民創発」による市民自治と多様な価値観を前提とした 「寛容と互助」の都市型コミュニティの形成

現代の都市化の進んだコミュニティでは、かつての農村型のコミュニティのように共同的な生産・生活基盤を自主的に管理する必要性が低く、地域課題の解決に対して行政依存的な傾向が強くなるという側面がありました。その中で、地域における地縁的なつながりによる町内会・自治会や、特定の地域課題の解決を目指すNPO等と、行政が協働して様々なコミュニティ施策を進めてきました。しかし、コミュニティ運営の担い手が固定化・減少する一方、一人暮らし世帯の増加や、生活利便性の向上等によって地域と関わることなく生活している人々が増え、これまでのコミュニティ施策では、新たな担い手を見出しにくい状況にあります。

また、近年では、地域課題の解決において、企業や大学等の果たす役割が大きくなりつつあります。SNSの浸透などにより、地域レベルや区域レベルで志向が近い人々がつながる機会が増え、社会的な地域課題を解決する動きも出てきています。

このような背景の中、本市は、再開発などによる急速な人口増加地域を抱える一方で、高度経済成長期に形成された地域が成熟化するなど、地域により様々な状況にあることに加え、昔から地域の中で育まってきた多様性を基底とした多文化共生の土壤が根付いています。さらに、環境、福祉、まちづくりなど、様々なフィールドで市民による先駆的な自治の取組が活発に展開されてきたという自治の記憶があります。

また、「寛容」という考え方とは、一人ひとりが、あるがままの自分で社会に受け入れられているという安心感を市民にもたらすだけでなく、お互いの違いを個性と捉える土壤となり、多様な参加を促し、各々の個性が有機的につながることで、まちの多様性を可能性として生かしていきます。そして、超高齢社会を迎えるに当たり、ケアを必要とする人が確実に増えしていく中、日々の暮らしや災害時において、地域で助け合い支え合う「互助²³（共助²⁴）」の必要性が高まっています。

こうした本市の特長等を生かして、市民自治と多様な価値観を前提とし、様々な主体の出会いとその相互作用によって、新たな価値を生み出しながら変化を促し、地域の課題をしなやかに乗り越え、その具体的な解決を導く「市民創発」へのパラダイムシフト²⁵により、多様なつながり（ソーシャルキャピタル²⁶）や居場所を創出しつつ、幸福度が高く、誰もが認められる社会的包摂の進んだ持続可能な都市型コミュニティを目指すという将来像を「希望のシナリオ」として掲げ、その実現に向け、総合的に施策を展開していきます。

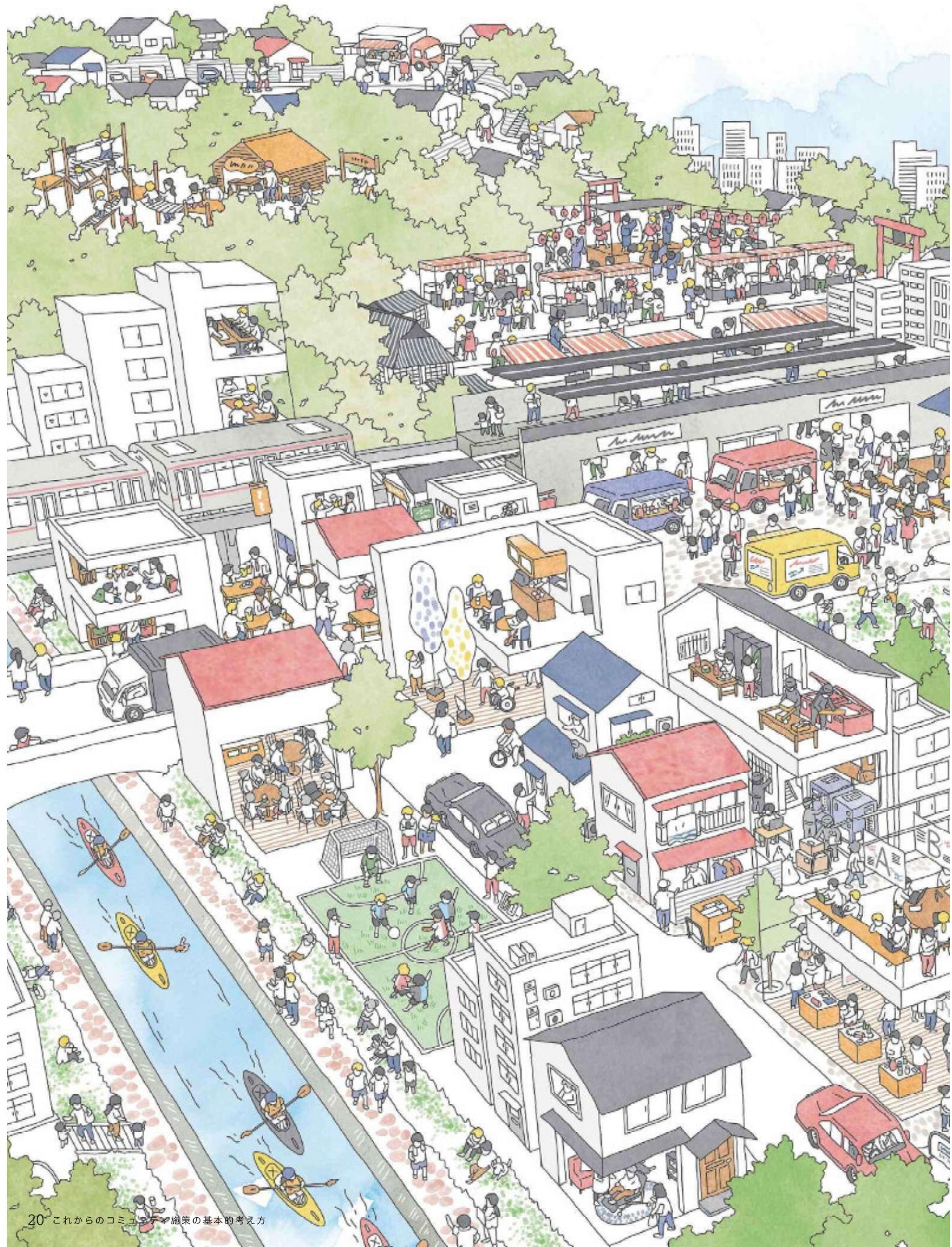
23 互助…川崎市地域包括ケアシステム推進ビジョンでは、「助け合いの仕組み」として、公費負担の視点から、「自助」「互助」「共助」「公助」の四つに類型化していて、「互助」は自発的にお互いに支え合うこと

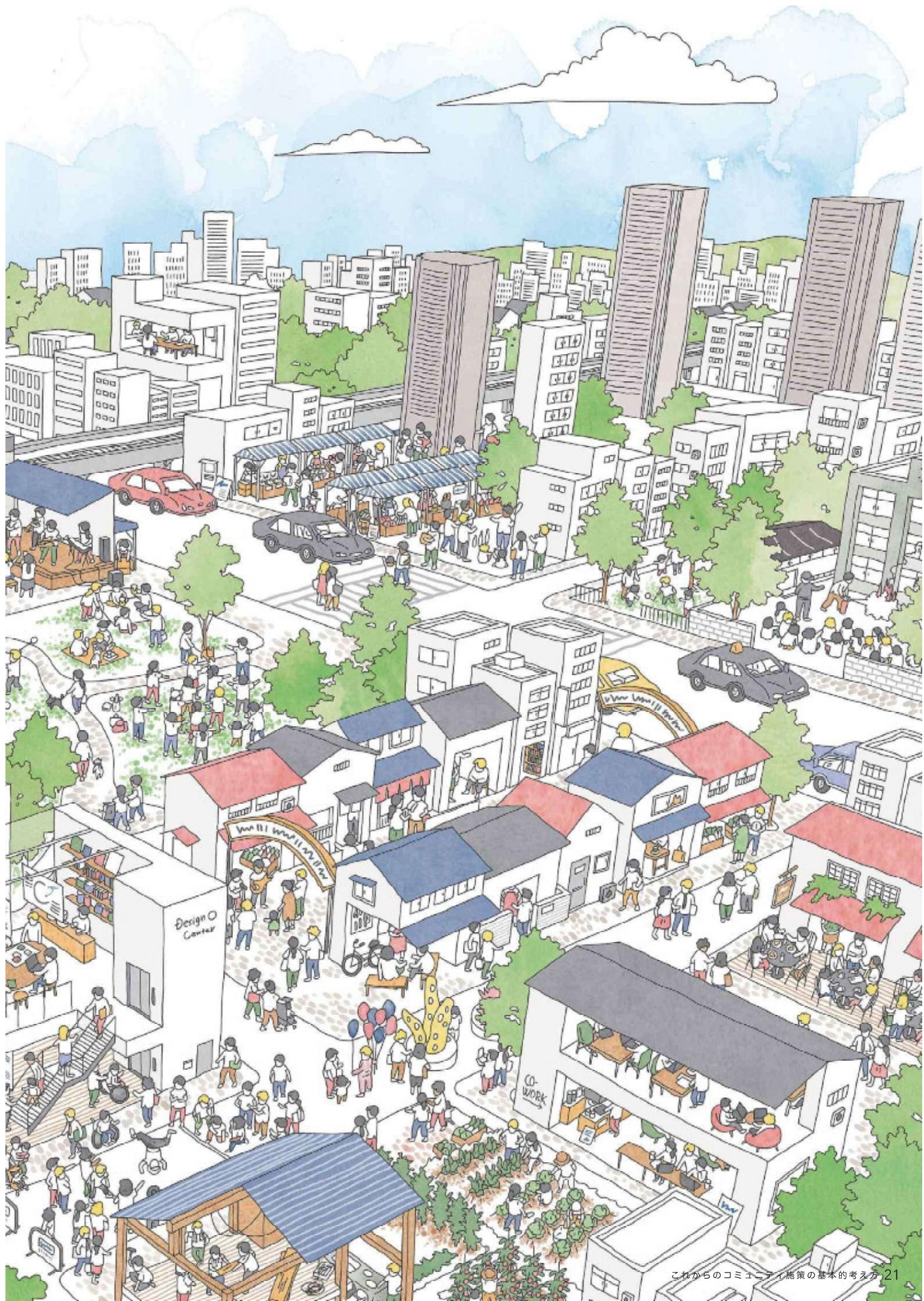
24 共助…川崎市地域防災計画では、基本理念として、「自助（個人）」「共助（地域）」「公助（行政）」を掲げて、地域における防災力の向上を図っており、「共助」は地域内及び地域同士で連携して地域の安全を守ること

25 パラダイムシフト…当然のこととして考えられてきた認識や価値観などが劇的に変化すること

26 ソーシャルキャピタル…人と人とのつながりのあり方のことで、社会関係資本と訳され、つながりが豊かなほど、より社会の効率性を高めることができる信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴

地域に広がる「まちのひろば」～「希望のシナリオ」のイメージ～





森の遊び場

ワクワク・ドキドキ、子どもたちは遊びの天才！自然の中で創造力を育みます。

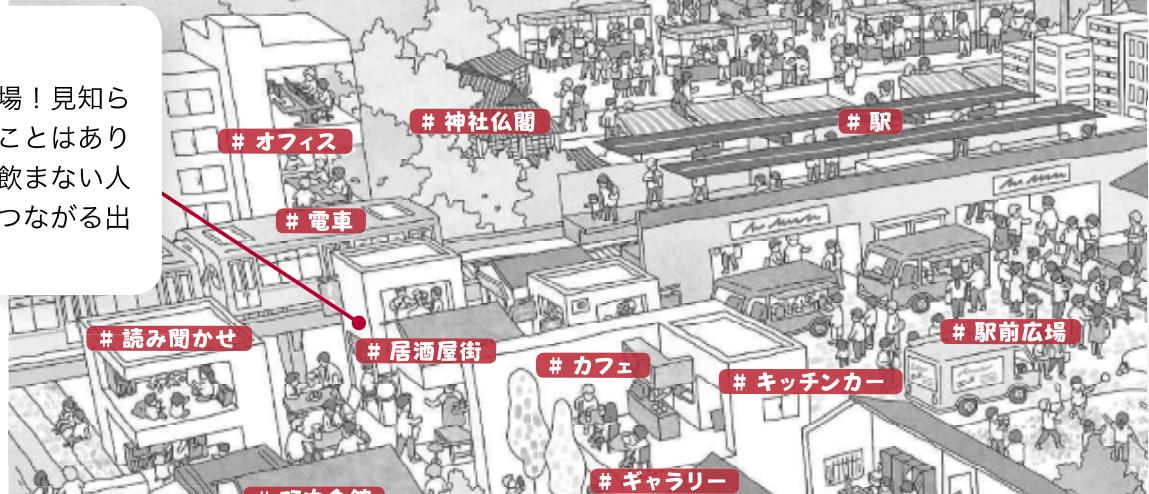
移動店舗

買い物に行くのが大変な高齢者等の強い味方。お客様と販売員、お客様同士といったつながりをつくります。



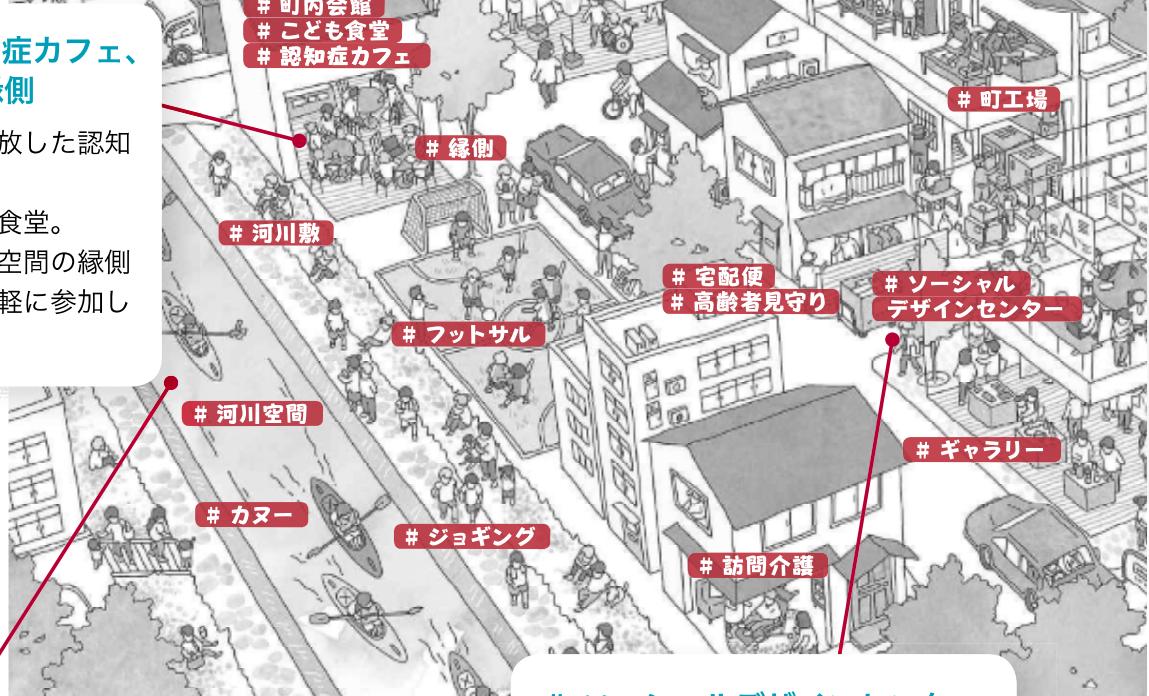
居酒屋街

居酒屋は大人の社交場！見知らぬ人と意気投合したことはありませんか。飲む人も飲まない人も楽しみながら人とつながる出会いの場です。



町内会館、認知症カフェ、こども食堂、縁側

町内会館や自宅を開放した認知症カフェ。
こども食堂はまちの食堂。
家の中と外をつなぐ空間の縁側も使って、誰でも気軽に参加しやすくなっています。



河川空間、河川敷

水辺では思い思いのアクティビティ（活動）が行われています。

ソーシャルデザインセンター

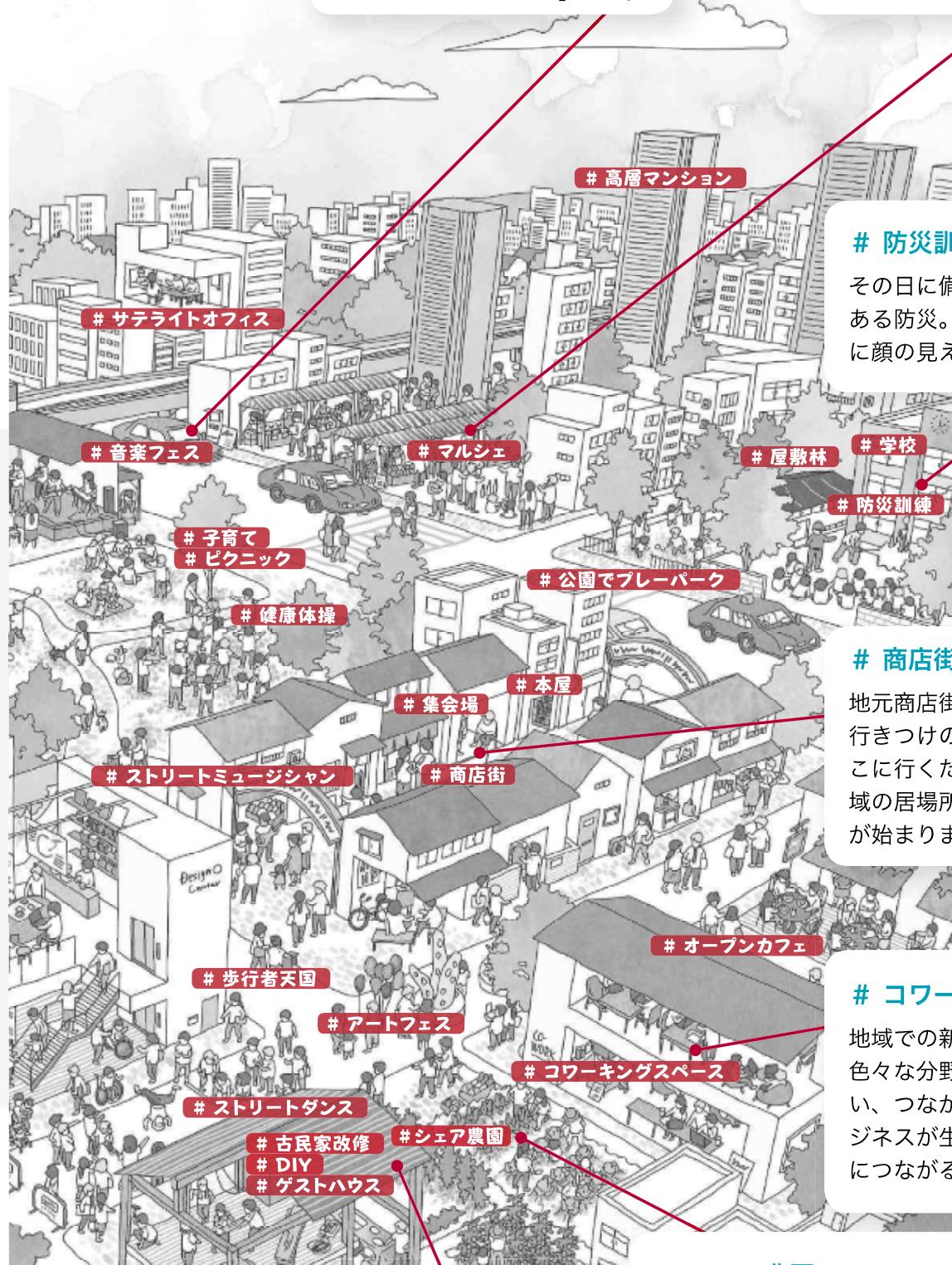
人や団体・企業、資源・活動をつなぐコーディネート機能やプロデュース機能などを有し、まちにちょっと新しい何かを生み出す空間です。

音楽フェス

道路や広場など、いつもの場所が特別な場所に。非日常体験がまちの遊び心を満たす、これも一つの「まちのひろば」です。

マルシェ

生産者と消費者の出会いの場。物や言葉のやりとりから何かが生まれ、まちの空間が変わります。



古民家改修、DIY、ゲストハウス

空き家を DIY でリノベーション（修復、再生）。誰もが気軽に集える出会いの場や、地域活動の場として生まれ変わります。

シェア農園

まちを耕す。育てる喜び、食べる喜び、分け合う喜び、楽しさもシェア。手塩にかけて丁寧に丁寧に。仲間づくりと一緒に。

防災訓練

その日に備えて。誰もが関心のある防災。防災訓練をきっかけに顔の見える関係を築きます。

商店街

地元商店街の私のお気に入り。行きつけのお店ができれば、そこに行くだけでほっとできる地域の居場所。自然と井戸端会議が始まります。

コワーキングスペース

地域での新しい働き方を提案。色々な分野の人たちと刺激し合い、つながることで、新たなビジネスが生まれ、地域の活性化につながる(かもしれない!?)。

2 今後の方向性

(1) 多様な市民や組織の連携によるコミュニティ形成や豊かな市民社会に向けた環境づくり

高度経済成長期においては、成長することが輝きを持ったメッセージとして受け止められ、成長することであらゆる課題が解決されるという考え方を前提とし、一つの解が導き出される時代だったともいえます。

こうした時代においては、煩雑な課題であっても、専門化、高度化、分業化、効率化などにより、あらかじめ解決策を予見しながら計画的に対処することができました。

人口減少が進む今後は、成長一辺倒ではなく、価値観が多様化するなど、言わば絶対的な一つの正解がない不確実性の時代を迎え、こうした時代における複雑な課題に対しては、結果が予測できないイノベーション²⁷による解決方法が有効な局面もあり、そのためには組織を超えた多様な主体による創発型の取組が必要です。

地域に目を向けると、自分が属する地域コミュニティとして住民が捉えるエリアの広さや世帯数にも大きな幅があり、戸建てと集合住宅の割合、住民の流動性、平均年齢、外国人居住等、コミュニティが非常に複雑化かつ多様化しています。また、地域に関わる組織も、町内会・自治会、アソシエーション型組織をはじめ、様々な組織・団体、企業等があり、地域ごとに異なっています。

このような中で、地域それぞれが、その地域の資源や特性を生かし、集団を超えた個人のつながりを重視しながら、多様な市民や組織が連携した協働型のアクションを積極的に進めることで、都市型コミュニティが形成され、同時に地域課題への対応能力が高まって新たな取組につながる循環が生まれます。こうした循環プロセスを通じて人々の組織の間の信頼が育まれることにより、誰もがその存在と尊厳が認められ、社会的包摵の進んだ、市民創発型の豊かな市民社会に向けた環境づくりを行っていきます。

こうなったらしいなと思う10年後の地域の姿： 市民検討会議ワークショップでの意見

- ・地域の人が参加しやすいコミュニティ、情報発信する場、多様な人が住みやすいまちに
- ・行政に頼るだけでは未来は切り拓けない。自分たちで動くことも大切
- ・そこに関わる人の思いや考えを活かした場づくり、目標をつくってからの場づくりを行うことが重要

(2) 超高齢社会に対応する地域コミュニティとその後を見据えた取組の展開

超高齢社会においては、高齢になるほど移動能力が低下し、生活圏が狭くなることから、地域コミュニティの重要性が高まっています。日常生活を不便なく営み、孤独にならないよう趣味やボランティア活動等の社会的居場所があり、健康的に歩いて暮らせ、また、介護が必要になっても住み続けられることに加え、ケアに携わる側から見た課題等に対応できるコミュニティづくりを地域包括ケアシステム構築に向けた取組と一体的に推進します。さらには、子育てや環境・防災面での課題等を地域で解決する取組を推進します。

また、川崎市全体では当面人口が増加・維持傾向ですが、駅からの利便性が悪い地区や、1960～1970年代に開発された住宅団地等では、人口や世帯数が減少している地域もあり、今

27 イノベーション…新しい考え方を取り入れて、社会的に意義のある新たな価値を創造し、大きな変革を促すこと

後、加速的に減少する恐れもあります。このような地域では、高齢化以外にも、空き家・空き地が発生する等、安定的に地域を支えることが難しくなることが想定されることから、人口減少時代における地域コミュニティ形成の取組を下支えする施策を進めます。

こうなったらいいなと思う10年後の地域の姿：
市民検討会議ワークショップでの意見

- ・人生100年時代、地域ぐるみで見守りを。子育て層も老後も安心して暮らせるまちを目指す
- ・高齢者を「光齢者」と捉え、学校や子育て世代の手助けになるしくみができること
- ・60歳以上の活躍、地域での新しい働き方

など

(3) 川崎の地域固有の資源の発掘と再評価、活用策の推進

「ないものねだり」から「あるものさがし」へと思考方法を組み替え、川崎のまちの可能性を前提に、市内にある人的資源や地域資源、自然環境など、様々な地域固有の資源を発掘し、その再評価と地域診断の作業を進めるとともに、公共施設などに関する考え方の再整理も行いつつ、地区カルテとしての整理、情報共有を進めます。また、地区カルテそのものの作成手法や活用が一層充実するための取組を進めます。

本市においては、昭和46（1971）年の都市機能図集や昭和51（1976）年の地区カルテの作成をはじめ、地区カルテの手法を活用してまちづくりを展開してきた経過があります。

現在、地域包括ケアシステムの構築に向けて、地区カルテを活用して地域情報の集約と見える化を進め、地域づくりの取組を展開しています。今後は地区カルテの協働作成やツールとしての組織的活用などに向けて取組を進めていきます。

さらには、資源の置かれている環境、位置づけや目的、制約条件などの社会的関係を捉え、より戦略的・効果的な活用のあり方について検討します。

こうなったらいいなと思う10年後の地域の姿：
市民検討会議ワークショップでの意見

- ・区内にある既存の地域資源について、一層の魅力アップ
- ・町内会館、マンションの交流室、企業の空きスペースを交流の場として開放
- ・公共施設開放のしくみを簡単に
- ・空き家のシェアリングやコンビニを地域の場として活用

など

